

漆器業および蚕糸業からみた木曽平沢の地域構造

Regional Structure of Kiso-Hirasawa from the Perspective of the Lacquerware and Sericulture Industries

堀 菜那子* 片 山 伸 也**
Nanako HORI Shinya KATAYAMA

要 約 木曽平沢を含む旧榑川村は近世より漆器業を生業として発展してきたが、近代では漆器以外に唯一利益を期待できた養蚕業が盛んになった。近代の蚕糸業の盛衰が他の産業に影響を与えたことが既往研究で指摘されており、本研究では伝統的産業である漆器業と近代的産業である蚕糸業双方の視点から広域的な木曽平沢の地域構造を論じた。統計資料から、平沢は漆器製造の副業として養蚕業を営んでいた可能性があり、蚕糸業の影響が木曽平沢にも浸透していたことがわかった。また、漆器業は山側、蚕糸業は麓側との結びつきがそれぞれ強く、特に蚕糸業においては鳥居峠を挟んだ地域構造的境界があることが明らかとなった。さらに復元地籍図を用いた都市空間の変遷の明確化を行い、漆器業・蚕糸業に関わる土地利用を比較することで、蚕糸業の衰退後は斜面地の桑畑を漆器工場へ転換するなど、再び漆工町としての色を強めていった平沢独自の重層的地域構造が明らかとなった。

キーワード：地域構造、都市空間、漆器業、蚕糸業、木曽平沢、地籍図

Abstract The former village of Narakawa, which includes Kiso-Hirasawa, developed through the lacquerware industry starting in the early modern period. In the modern era, the sericulture industry also became a significant contributor to the local economy. This study examines the regional structure of Kiso-Hirasawa from a macro perspective, encompassing both the traditional lacquerware industry and the modern sericulture industry. The sericulture industry in Hirasawa was engaged in as a sideline to the lacquerware industry. However, the lacquerware industry was closely linked to mountainous areas, while the sericulture industry was primarily situated in the foothills, and there was a significant regional structural boundary at Torii Pass. Additionally, a comparison of land use associated with the lacquerware and sericulture industries, based on a restored cadastral map, revealed that mulberry fields were converted to lacquerware factories after the decline of the sericulture industry, thereby uncovering the distinctive, multilayered regional structure of Kiso-Hirasawa.

Key words : Regional structure, Urban space, Lacquerware industry, Sericulture industry, Kiso-Hirasawa, Cadastral map

1. はじめに

1-1. 研究背景と目的

長野県塩尻市の木曽平沢（以下、平沢）は近世より漆器業を生業として発展してきた町であり、平成18年（2006年）には漆工町と呼ぶにふさわしい町並みが評価され、重要伝統的建造物群保存地区に選

* 家政学研究科住居学専攻 修了
Graduate School of Home Economics,
Division of Housing and Architecture

** 建築デザイン学科
Department of Architectural Design

定されている。しかし漆器業を支える関連産業は平沢では完結せず、原材料の生産や製品の流通など、農林業や周辺他都市との関係を含めたより広い範囲での地域構造を面的に捉えることが必要である。一方で、明治以降の平沢を含む旧榑川村（以下、榑川村）は、農業に適さない山間地にありながらも、檜物細工および漆器以外に唯一利益を上げることができた養蚕業が盛んになる。養蚕業は蚕糸業の一部であり、蚕糸業に基づく岡谷・松本を中心とした地域構造に平沢も組み込まれたと言える。

そこで本研究では、木曽平沢の発展を支えてきた漆器業・蚕糸業に着目し、各々の産業からみた地域の補完的な関係を分析することで、木曽平沢および旧榑川村の近代化以前と以後の重層的な地域構造を明らかにすることを目的とする。

1-2. 既往研究と本研究の位置づけ

漆器業・蚕糸業全般について、両産業ともに地理学的研究と社会学的研究が中心に行われている。漆器業に関しては、漆工町など特殊な集団単位であるため、その集団システムから社会学的意義を見出す研究、全国各地の漆器生産地の立地を地理学的なアプローチで解く研究がみられる^{1)~4)}。蚕糸業に関しては、近代化を遂げた明治後期に開設された製糸工場を有する地域を中心とした工業システムを地理学的観点から考察した研究がみられる^{5)~7)}。特に、蚕糸業の盛衰による地域産業の転換に関する研究では、蚕糸業（養蚕業）は副業として日本全土に広がっており、「養蚕+他の生業」という産業形態となっていた世帯・地域が多くあったこと、そのため蚕糸業が昭和30年頃に衰退してからは、長野県や山梨県では農家が所有していた桑畑が果樹園に代わっていることが指摘されており⁸⁾、蚕糸業はその盛衰によって地域の他の産業に影響を与えたといえる。

本研究では、木曽漆器生産地の平沢について、伝統的産業である漆器業と近代的産業である蚕糸業双方の広域的な視点から地域構造を論じる。

2. 統計からみた榑川村の産業

2-1. 榑川村の地勢

榑川村は長野県のほぼ中央に位置しており（Fig.1）、平成17年（2005年）に北側の塩尻市に編入している。しかし江戸時代に奈良井村（枝郷として平沢を含む）・贅川村（両村は後に榑川村に合

併）は尾張藩の領土で、贅川関所が贅川以北の松本藩との境であった。また、明治22年（1889年）から平成17年までは木曽郡（西筑摩郡）に含まれており、歴史的には南西側の木曽谷の一員として岐阜県や愛知県との繋がりが深い。山に囲まれた木曽路十一の宿場の中でも奈良井宿・贅川宿の二か所だけは鳥居峠を挟んだ北側に位置しているために時代によって行政境界の変化がみられ、山側（尾張藩・木曽谷）と麓側（松本藩・塩尻）の領域の狭間に位置しているといえる。

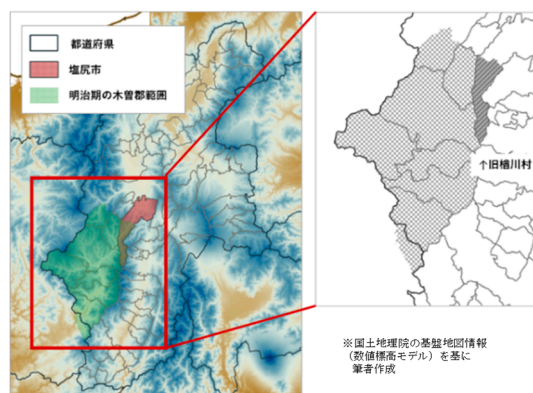


Fig. 1 Location of the former village of Narakawa

2-2. 榑川村の生業

a. 榑川村の職業構成

明治22年に奈良井村と贅川村が合併し榑川村となったため、榑川村は北から贅川・平沢・奈良井の大きく3地区に分かれた。榑川村の大正15年における職業構成の特徴として、贅川は畑作・養蚕の農業集落、平沢は漆器を中心とする工業集落といえる⁹⁾（Fig.2）。また、奈良井は木製品を中心とした工業

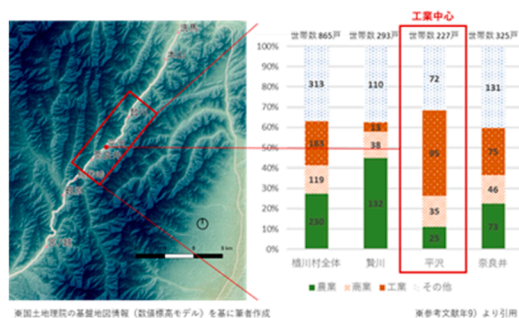


Fig. 2 Location of each district and occupational composition in the Village of Narakawa

と畑作・養蚕による農業、中山道を南に下った先にある鳥居峠を越える前の休憩所として発展した宿場による商業とが融合した特徴をもっており、3つの地区はそれぞれ異なった性格であった。

b. 榑川村の漆器業

木曽漆器は室町時代初期に富田（現在の長野県木曽郡木曽町福島）で発祥し、江戸時代初期に奈良井村に伝わったとされている¹⁰⁾。榑川村で生産される漆器は主に奈良井で作られる塗櫛、平沢で作られる平沢塗物が挙げられるが、漆器生産が本格化した18世紀には「木曽物」「木曽塗物」という名称で全国に普及しており、19世紀になって奈良井の漆器も含めて「平沢塗物」の名称で呼ばれるようになった¹¹⁾。大正から昭和期にかけて榑川村で生産された漆器（以下、平沢漆器）の製造価額と福島町八沢で生産された漆器（以下、八沢漆器）の生産額を比較する^{注1)}と、八沢漆器は昭和13年（1938年）頃から下降している（Fig.3）。その背景として、昭和16年（1941年）に軍需の弁当箱を中心に需要が増大したが、八沢は粗悪品を製造してしまったことに加え、富田町に曲げ物細工を利用した軍需工場が設立され木地屋関係の職人たちが吸収されたことにより八沢漆器の生産は衰退していったと考えられる¹²⁾。一方で、平沢漆器は第一次世界大戦（大正4年頃から）や世界恐慌（昭和4年頃から）の際に材料入手困難により下降しながらも、終戦時には回復していることから、昭和以降の榑川村における漆器産業への依存度が八沢より高かったことがうかがえる。

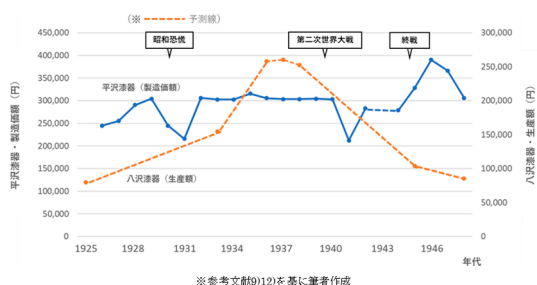
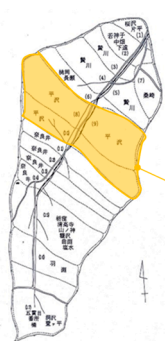


Fig. 3 Production value of Hirasawa lacquerware and amount of Yasawa lacquerware from the Taisho Period to the Early Showa Period

c. 榑川村の蚕糸業

蚕糸業は近代化による器械製糸の導入で隆盛になり、山間部の榑川村にも影響が及んでいた⁹⁾。榑川村の農家にとって養蚕は大きな収入源であり、特に農業に従事する割合が高い贅川の農家は軒並み養蚕を行っていた¹⁷⁾。明治から昭和にかけての榑川村の養蚕業に関する統計資料は、主に長野県統計書¹³⁾や長野県市町村提要¹⁴⁾、長野県蚕糸業統計¹⁵⁾などがあるが、これらの資料では贅川・平沢・奈良井など各地区の養蚕戸数や桑畑面積について把握することは難しい。限られた資料の中で養蚕戸数の各地区の内訳を把握できる資料として、塩尻市公文書館準備室所蔵の榑川村役場文書に、大正15年の榑川村を調査区別（第1～17調査区）に調査した集計表がある¹⁶⁾。これによると、昭和5年の春蚕において、榑川村の養蚕戸数333戸に対して平沢（第8～10調査区）の養蚕戸数は28戸あり、榑川村の約9%を平沢が占めていたことがわかる（Fig.4）。



調査区 番号	地名	大正15年 養蚕戸数		昭和5年 養蚕戸数	
		春蚕	夏秋蚕	春蚕	夏秋蚕
第1区	桜沢 等	19	25	22	20
第2区	中畑 等	27	30	22	18
第3区	贅川	17	21	16	20
第4区	贅川	17	35	26	5
第5区	贅川	18	25	30	30
第6区	桃岡・長瀬	24	25	25	28
第7区	桑崎	28	34	32	13
第8区	平沢	9	18	11	15
第9区	平沢	6	16	12	12
第10区	平沢	3	11	5	5
第11区	奈良井	11	26	22	34
第12区	奈良井	3	19	21	25
第13区	奈良井	7	31	9	11
第14区	奈良井	8	25	15	25
第15区	柳窪 等	21	31	28	28
第16区	羽淵	18	21	21	25
第17区	萱ヶ平 等	3	22	16	20

※右図 参考文献9)より引用。左表 参考文献16)を基に筆者作成

Fig. 4 Number of sericultural households in the Village of Narakawa in 1916 and 1930

生業に関して贅川・平沢・奈良井の各地区は違った特色をもっており、平沢は工業中心であった。世界恐慌時に木曽漆器の一つである八沢漆器は衰退していったが、平沢漆器は不況を乗り越え、終戦以降、さらに高度経済成長期に売り上げを伸ばしていることから、榑川村および平沢における漆器産業の比重の大きさがわかった。一方で、農業が主体であった贅川に限らず、平沢にも桑畑の栽培や養蚕戸数の記録があることから、蚕糸業が平沢にも影響を及ぼしていたことが明らかとなった。

3. 漆器業・蚕糸業における地域間の繋がり

3-1. 榑川村を中心として

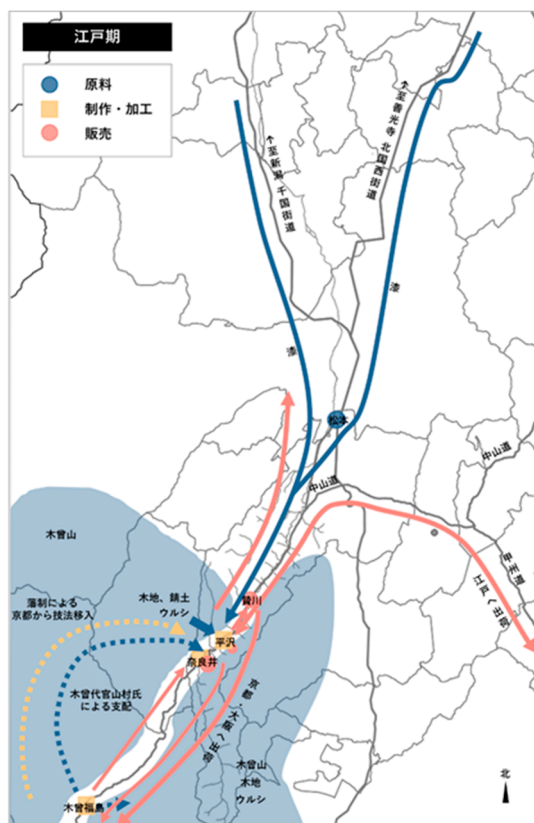
a. 木曽漆器の地域間の繋がり（江戸期）

木曽における漆器業の動きが史料で確認できるのは、江戸期の藩政による奨励が行われ産業として確立されてからである。享保6年(1721年)榑川村の『尾州御巡見衆へ口上之扣』は、木曽漆器の材質・技法の在り方も具体的に述べており¹¹⁾、この頃の木曽漆器の原材料は、木地以外のすべてが他地域からの購入品でまかなわれていた。技術についても尾張藩政庁は領内の産業振興育成のために、京都から技術者を派遣するなど木曽漆器生産地へ原材料調達や漆器生産技術の向上に向けた便宜を積極的に図っていた。また、福島村八沢で生産された漆器が奈良井村へ集荷され各地へ販売されたり、奈良井村

で生産された漆器が榑川村の住民によって京都や江戸などの他地域で販売されるなど、木曽谷周辺の漆器生産地には活発な地域内結合も存在したことがわかる (Fig.5)。

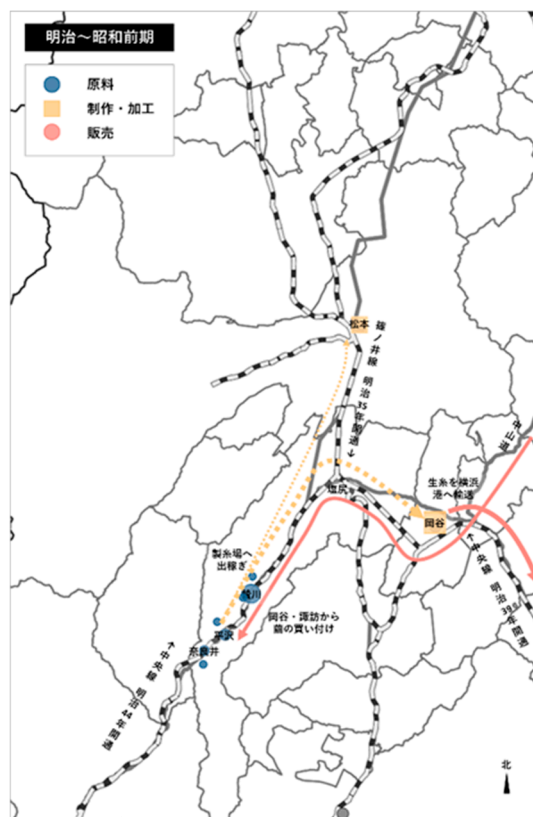
b. 養蚕の地域間の繋がり（明治から昭和前期）

元来、養蚕と製糸は未分化の状態において発展してきたもので、明治期以降、近代産業として両者が分業化されてからも、両者の立地・分布は地域的にそれほど離れてはいなかった¹⁷⁾。明治8年(1875年)に榑川村の北東に位置する岡谷市に製糸場ができたことで榑川村の養蚕業は盛況になった。繭は仲買人が買いにきており、集荷した繭は奈良井駅や榑川駅から諏訪に送っていた。また明治から大正、昭和にかけて、榑川村から諏訪・岡谷や松本の製糸工場に工女として働きに出ていた¹⁸⁾ (Fig.6)。



※参考文献9)11)を基に筆者作成

Fig. 5 Kiso lacquerware's regional relationships from the perspective of the Village of Narakawa

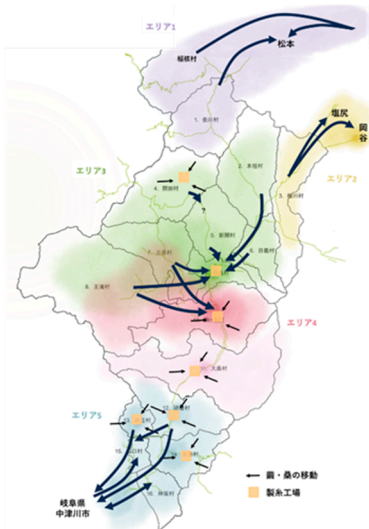


※参考文献11)17)を基に筆者作成

Fig. 6 The sericultural industry's regional relationships from the perspective of the Village of Narakawa

3-2. 檜川村近隣の村と比較して

古くから木曽谷の村々では農作物が育ちにくいやせた土壌でも育つ桑を利用しどの村でも例外なく養蚕業が営まれており、税収のため木曽谷一帯で養蚕を奨励されていたことに鑑み、檜川村を含む木曽谷の蚕糸業からみた地域構造を明確するために養蚕業の繭出荷先における木曽谷の構造の分析を行った。分析方法として、明治後期から昭和期において木曽郡に属していた以下 16 村の繭の出荷先を各々の村誌で確認を行った^{19)~31)}。Fig.7 より、木曽郡における明治期から昭和期にかけての繭出荷先が大きく 5 つのエリアに分かれていたことがわかる。



1. 奈川村	松本市	9. 福島村	村内
2. 本祖村	福島町	10. 駒ヶ根村	村内
3. 檜川村	岡谷市、松本市	11. 大桑村	村内
4. 開田村	村内、不明	12. 読書村	村内
5. 新開村	福島村	13. 田立村	村内
6. 日義村	福島町	14. 吾妻村	村内
7. 三岳村	上松町（駒ヶ根村）、福島町	15. 山田村	読書村、岐阜県（中津川村）
8. 王滝村	上松町（駒ヶ根村）、福島町	16. 神坂村	不明、岐阜県

Fig. 7 Destinations of cocoons in 16 villages in Kiso County

エリア 1. 松本方面

唯一松本に繭を卸していた奈川村は、昭和 23 年に西筑摩郡（のちの木曽郡）から南安曇郡（のちの東筑摩郡）に編入し、平成 17 年には松本市に編入した沿革がある。

エリア 2. 岡谷・塩尻方面

主に檜川村が繭を出荷しており、日義村においては木曽福島町の製糸工場が廃業してから岡谷方面に

出荷していた。

エリア 3. 木曽福島方面

木曽郡の中で最も繭の移出元が多かった。木祖村と王滝村を除いた 5 村町（福島町・新開村・日義村・開田村・三岳村）は平成 17 年に合併して木曽町になっている。

エリア 4. 駒ヶ根村・大桑村

製糸工場を持ち、村内で完結していた。駒ヶ根村に関しては三岳村と王滝村からも繭を入荷しており、木曽福島と一部移出元が被っている。

エリア 5. 岐阜方面

読書村以南の 5 村は岐阜県との移出入がみられた。読書村・田立村・吾妻村に関しては製糸工場を有しており、のこの神坂村と山田村はそれぞれ昭和 33 年と平成 17 年に岐阜県の中津川市に編入している。

明治初期以前は農作物が育たない地もしくは農閑期に補助的役割として養蚕が行われており、養蚕で獲った繭は自家で製糸するか、村内分をまとめて座繰り製糸で糸にして売っていたくらいであった。しかし明治後期になって自村や隣接した村に器械製糸工場ができたことで繭は村内外問わず集められることとなり、さらに鉄道開通も相まって元来より広域流通商品であった繭・糸はその性質をより強固にしたため養蚕と製糸を適地性に従って明確に分業化したと考えられる。

エリア 1・2・3・5 は共通して、繭の出荷先と合併、もしくは編入していることから、近代的産業である蚕糸業の産業構造が現在の行政境界に反映されていることがわかる。

また、エリア 1・2・5 は麓側が出荷先であり、エリア 3・4 は山中に出荷し、そこから横浜港へ生糸が出荷されている。したがって、蚕糸業の構造として大規模な製糸工場が多く立地する麓の平坦地（松本や岡谷など）との繋がりが強い一方で、エリア 3・4 程度まで離れると木曽谷内の製糸工場との繋がりが優先されたと考えられる。

檜川村周辺の地域に着目すると、日義村誌には繭の出荷先として「大正から昭和 11 年頃まで福島製糸株式会社が買い手で、（省略）つぶれてからは諏訪の片倉へ売った」と記載されている²³⁾。前述したとおり檜川村は岡谷・諏訪方面に繭を出荷していた一方で、木祖村・日義村は福島町（現在の木曽福

島)の製糸工場に繭を出荷しており、岡谷方面に卸していたという記録は確認できなかった。したがって、鳥居峠を挟んで繭の出荷先が異なっており、蚕糸業における地域構造の境界が鳥居峠に存在していたと考えられる (Fig.8)。福島村の製糸工場で作られた生糸は、岡谷・諏訪の製糸工場と同じく横浜港に運ばれていた。横浜港の開港は安政6年(1859年)、福島村に製糸工場が初めてできたのは明治10年、鉄道が開通したのは明治43年であるため、鉄道敷設前は畜力や車で中山道を通して横浜港へ運ばれていたと考えられる。



Fig. 8 Cocoon destinations in the villages of Narakawa, Kiso, and Hiyooshi

3-3. 漆器業・蚕糸業の構造比較

漆器業は山側の繋がりや中山道やその他街道を利用した麓側の両側の繋がりをもっていた一方で、蚕糸業は鉄道の開通により繭の運輸がしやすくなったために、檜川村の北東に位置する岡谷・諏訪地方との結びつきが強かったことがわかる (Fig.9)。しか

し、檜川村の養蚕業は第二次世界大戦中の食糧不足で桑を麦畑にする奨励がなされたために壊滅し、戦後は檜川村内で最も農業従事率が高かった賛川でも勤め人が主流となったために、就労人口の多くが漆器業・養蚕業の枠組みから外れるなどの変化がみられ、さらなる地域構造の変化があったことが推察される。

4. 木曽漆器産地の土地利用からみた都市構造

4-1. 分析方法と資料

木曽漆器の生産地である檜川村平沢と福島町八沢における漆器業と蚕糸業からみた都市空間の変遷を、旧土地台帳と各種図面を用いて分析した。旧土地台帳には、地番、地目(宅地・畑・田・原野・山林・墓地・鉄道用地など)、面積、所有主氏名、沿革などが記載されている。本研究では旧土地台帳に記載されている地番と現在の地番を照らし合わせ、地目を確認し復元図を作成したため、分筆や合筆が行われている地番については旧土地台帳が使用されていた当時の範囲とは異なる部分がある。平沢については「屋鋪田畑画面図」(江戸後期)と「平沢字限図」(明治中期)、八沢については「福島市街絵図」(江戸初期)と「福島絵図」(明治初期)、「八澤町概念図」(明治40年頃)を用いて建物配置や土地利用を把握し、地番に反映させた。

4-2. 檜川村平沢

平沢の明治40年頃と昭和20年頃の復元地籍図を比較すると、中山道沿いに短冊状の宅地が連続し、その宅地の裏に畑があるという基本構成は同じであ

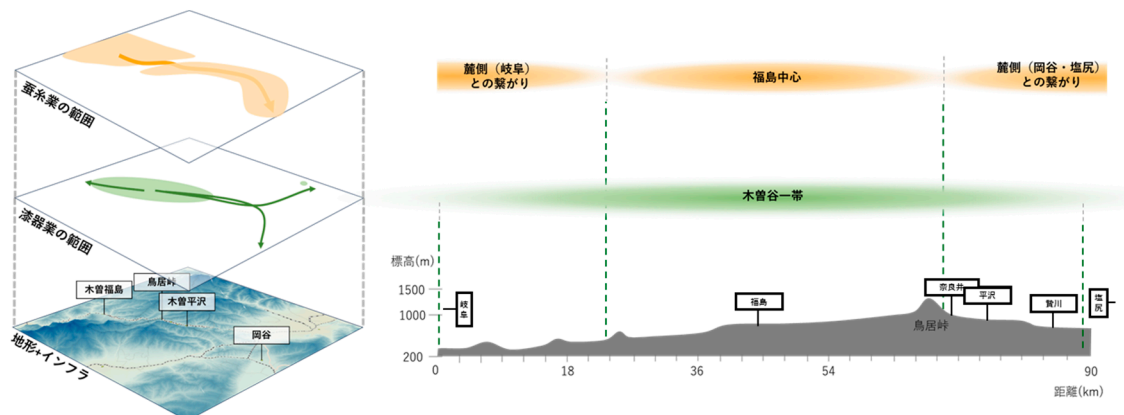


Fig. 9 Regional structure of the Kiso Valley from the perspective of the lacquerware and sericulture industries

ることがわかる (Fig.10)。平坦地の少ない土地柄から、田は全体面積の 10%以下であり、明治と昭和双方の地目別面積の割合を比較しても大きな変化はみられない。僅少の変化として宅地が増加し畑と田が減少している。明治 40 年頃には 奈良井川の左岸 (のちの旭町) に宅地はみられず、畑・田・原野・山林、一部墓地が広がっている。しかし近代以降、漆器産業の繁栄によって増加する世帯が、中山道沿いの古い町並みには納まりきらなくなったことで、大正から昭和にかけて奈良井川右岸沿いに金西町、川の対岸に旭町ができた。金西町の誕生は都市

空間を変化させはしたものの、新たに地割を引き直したわけではなく、東側の敷地から延長したように設けられた。また、明治 42 年に塩尻－奈良井間で鉄道が開通するが、線路は街の最も東側の一段高い段丘上に敷設され、かつ木曽平沢駅は昭和 5 年に設置されたため町並み空間に影響をおよぼすことはなく、江戸期から続く伝統的な地割が漆工町として現在まで続いている。

蚕糸業に関して、江戸期・明治期の絵図や旧土地台帳では畑に植えられた作物は確認できないが、昭和 5 年の記録¹⁶⁾には平沢の桑面積の記録があり、平沢が養蚕に関与していたと考えられる。また、木曽谷で養蚕が盛んになった理由として桑の育成のしやすさがあげられるため、中山道沿いの短冊状宅地の裏にある平坦地の畑では農作物を栽培し、奈良井川を挟んだ左岸の斜面地に桑が植わっていたと考えられる。何を本業としていた者が副業として養蚕を行っていたかについては資料的限界から不明だが、明治後期まで半工半農 (農閑期に漆器を作る体制) であったことや、左岸の斜面地の畑は右岸の町の漆器店などが所有していたこと、斜面地の上の方は桑畑として利用されていたこと¹⁸⁾から、漆器業の副業として養蚕業が行われていた可能性が考えられる。一方で、典型的な養蚕農家の特徴である蚕棚や養蚕室を有する家屋は平沢や奈良井にはみられず、奈良井は通常の部屋の畳を上げて養蚕をしていたという記録¹⁸⁾もあることから、蚕糸業はあくまでも一時的なものであり漆器業の比重の大きさがうかがえる。

漆器業に関して、本町は塗師や木地師の住居、漆器問屋が建ち並んでいることは変わっていないが、1970 年時点では金西町や、桑畑があったと考えられる旭町、今回の復元地籍図の調査範囲外である宮下・太田などに漆器工場が進出している。鉄道が敷設されたことで昭和初期から小物・曲物の他に座敷机や茶棚など家具類の製品が急速に増え、1960 (昭和 35) 年代、高度成長期であった当時の平沢では漆器の品種転換を行い座卓などの大物を扱うようになっていた。小物は手作業による複雑で細かな技術を要するため、器械化・代用漆の使用をせずに家内工業的手法で従来の生産方法を保っていた。一般的に髹漆作業は、短冊状の敷地の最も奥にある土蔵で行われた。しかし大物は間口三間、奥行三間半の土蔵では手狭であり、素地部門を中心に工場化・機械力の利用が進んだ。よって、工場用地とな

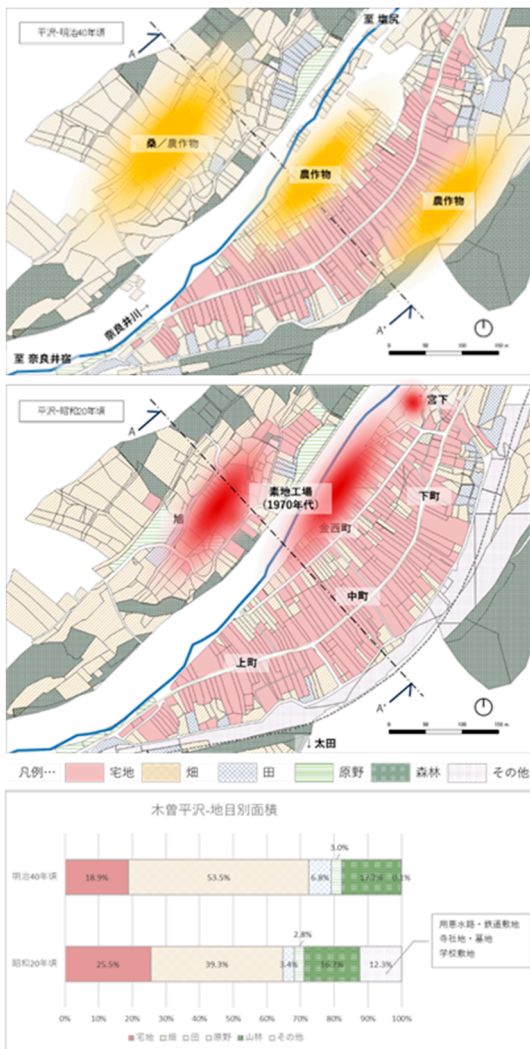


Fig. 10 Reconstructed cadastral map of Hirasawa (top: ca. 1907, bottom: ca. 1945) and area by land category

る広い場所を求めて畑であった金西町や旭町に新たな漆器工場が立地したと考えられる (Fig.11)。

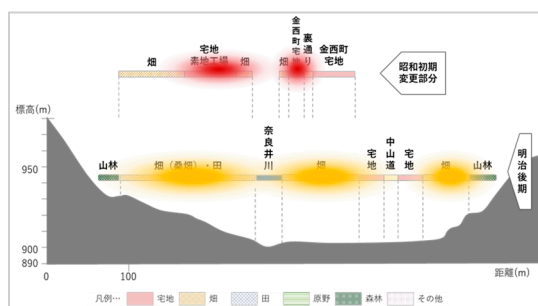


Fig. 11 A-A' cross-section of Hirasawa

4-3. 福島町八沢

福島町の明治 40 年頃と昭和 20 年頃の復元地籍図を比較すると、江戸期から続く宅地が中山道沿いに並んでいる様子が確認できる (Fig.12)。明治 40 年頃の土地利用の傾向として、中山道沿いを中心に宅地、宅地の裏や北東側に畑、八沢川・木曽川沿いに田・原野が分布しており、地目別の面積比率は同程度となっている。一方で昭和 20 年頃の土地利用をみると、宅地がほぼ全域にわたっていることがわかる。地目別面積をみても、宅地は明治 40 年頃から約 2 倍の面積となっており、畑・田・原野は減少している。

この宅地増加は二回起こっており、一回目は中央線開通によってもたらされている。明治 43 年に木曽福島駅が開駅し、ついで翌 44 年に中央線が全通してから、大正 15 年までの 15 年間に戸数 410 戸、人口約 1800 人の急激な増加をみせており、鉄道開通の影響がわかる。さらに大正 10 年の工業従事戸数も増加していることから、八沢漆器や福島製糸工場、国用製糸株式会社などの製糸業などの好況が推察される。二回目の戸数増加は昭和 2 年の福島大火を契機とするものである。大火後の復興計画によって昭和 9 年には上水道が完成するなど近代的都市としての形態を整え、昭和 2 年から昭和 12 年までの 10 年間に戸数 180 戸、人口約 1000 人が増加している²²⁾。その影響が八沢周辺の復元地籍図にも表れている。木曽漆器発祥の地とされる八沢はどちらの年代をみても宅地であることは変わっていない。しかし八沢漆器は大量生産時の粗製濫造により注文を停止されたことや世界恐慌による不振を契

機に漆器業は衰退したとされており、明治初期には約 150 戸あった漆器関係の店は大正 15 年には約 80 戸、現在は 2 店舗しか残されていない。

蚕糸業に関して、福島村の桑栽培や養蚕の様子を知ることができる資料は乏しいが、明治 44 年時点では 4 つの製糸工場が稼働していた記録が残っている²³⁾。そのうちのひとつ、信西社（のちの福島製糸株式会社）は西筑摩郡内にある製糸工場で一番の規模を誇っていた。器械製糸は水力が動力であったことから製糸工場は動力確保のため川沿いに建てられることが多かったが、木曽川沿いは既に宅地が広がっていることや氾濫の可能性に鑑みてか、信西社は原野や田が広がっていた八沢川沿いに立地してい

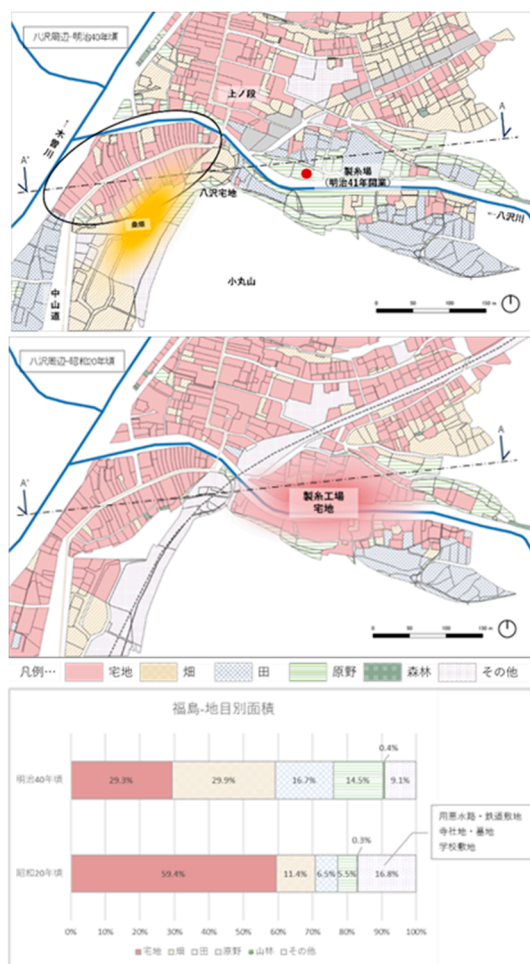


Fig. 12 Reconstructed cadastral map of Yasawa (top: ca. 1907, bottom: ca. 1945) and area by land category

た。復元地籍図をみると、信西社があったと考えられる周辺も宅地が増加している。福島町には地元のほかに美濃や飛騨方面から工女が働きに来てきたため、周辺の土地に宅地が増加したと考えられる。また、「八沢町概念図」（明治 40 年頃）からは八沢周辺に桑畑があったことが確認できており、鉄道開通以前は城跡がある小丸山の傾斜地に桑が栽培されていたと考えられる（Fig.13）。しかし第一次大戦後の好景気の時代から昭和初期にかけて隆盛であった製糸業も、戦争の激化とともに桑畑は食糧を確保するための農作物を栽培する畑に代わり、昭和 18 年には福島町から製糸工場は完全に姿を消した。

4-4. 木曽谷における産業と都市構造の変容

漆器業と蚕糸業からみた木曽谷の都市空間の変遷として、平沢が漆工町として独自性を高めていく中、八沢は宅地化の進行や商業の近代化・多様化などにより職工町としての性格を失い、都市的性格を強めていった。八沢を含む福島町は一つの産業に対する比重が小さく、漆器業・蚕糸業の他に工業や畜産業などさまざまな産業が町を支えていたことによって、漆器売り上げの低迷や蚕糸業の不振時に産業構造が他の産業へ移り変わっていったと考えられる。反対に平沢は漆器産地として必ずしも有利な立地とは言えないが、技術改良や販路開拓を積極的に行い、座卓などの大物が盛況になった高度経済成長期には斜面地の畑や桑畑を漆器工場にするなど、漆工町としての色を強めていった。

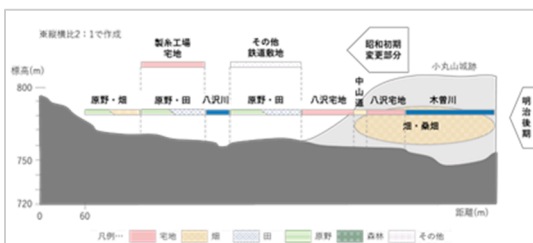


Fig. 13 A-A' cross-section of Yasawa

5. おわりに

本研究では統計資料を用いて木曽地域における漆器業と養蚕業の特徴を把握し、旧榑川村を中心とした周辺地域との関係性から木曽谷の地域構造を明らかにした。また、復元地籍図から両産業に関わる土地利用の変遷を明確化したことで、木曽平沢の都市

構造を明らかにした。平沢を含む旧榑川村において、漆器業は山側、蚕糸業は麓側との結びつきが強い地域構造をもっており、特に蚕糸業においては鳥居峠を挟んだ構造的境界があるという重層的特徴が見られた。さらに、斜面地の桑畑が漆器工場になるなど、木曽漆器の生産地としての近代化が蚕糸業の盛衰に伴って進行したことを示したことは、漆工町である木曽平沢の近代化の過程の一端を解き明かしたと言えるだろう。

<注>

- 1) 八沢漆器に関する統計資料が乏しく、同年代の比較として八沢漆器は生産額、平沢漆器は製造価額となり項目が異なっていることから、各漆器の年ごとの生産高の変化のみ着目し分析を行った。

<参考文献>

- 1) 荻村昭典：集団漆工地域の実態、社会学評論、5 巻 4 号、94-99、1955 年
- 2) 佐藤守・羽田新：漆器業における産地構造の工人型と商人型—伝統工業の変動メカニズム—、社会学評論、14 巻 3 号、74-95・102、1964 年
- 3) 小島和子：山間地における漆器産業—長野県西筑摩郡榑川村を事例として—、地理学報告、32 巻、35-42、1969 年
- 4) 馬場章：漆器業地域の技術変化、之潮、2016 年
- 5) 三沢勝衛、諏訪製糸業発達の地理学的意義、地理学評論 2(10)、813-834、1926 年
- 6) 大迫輝通：三重県北勢地区における桑園の衰退とその地域構造、地理学評論 34(2)、68-82、1961 年
- 7) 江波戸昭：蚕糸業地域の史的分析、地理学評論 34(3)、139-159、2016 年
- 8) 斎藤叶吉：甲府盆地における桑園と果樹園の立地関係、人文地理 10(2)、107-119・157、1958 年
- 9) 榑川村誌編纂委員会：木曽・榑川村誌四 近代 村を築いた人々、長野県木曽郡榑川村、1994 年
- 10) 吉田隆彦：木曽郡榑川村の漆器業に関する産業誌的覚え書き、信州大学教養部紀要、29・

77-118、1995年

- 11) 榑川村誌編纂委員会：木曾・榑川村誌三 近世 檜物と宿でくらす人々、長野県木曾郡榑川村、1998年
- 12) 木曾福島町教育委員会：木曾福島町史、第3巻(現代編2)、長野県木曾福島町、1983年
- 13) 長野県：長野県統計書、長野県総務部統計課、各年
- 14) 飯沼務：長野県市町村提要 全、共同刊行 長野県市町村提要刊行会(松本)、大正5年、大正14年
- 15) 長野県：長野県蚕糸業統計、長野県経済部蚕糸課、昭和29年～昭和59年
- 16) 榑川村役場：昭和5年 統計書類編冊、榑川村役場、1930年
- 17) 大迫輝通：繭地盤一繭取引と流通の構造一、古今書院、1979年
- 18) 榑川村誌編纂委員会：木曾・榑川村誌六 民俗 暮らしのデザイン、長野県木曾郡榑川村、1998年
- 19) 奈川村誌編纂委員会：奈川村誌 歴史編、奈川村誌刊行委員会、1994年
- 20) 木祖村誌編纂委員会：木祖村誌 源流の村の民俗 民俗編、木祖村、1998年、
- 21) 長野県木曾郡開田村役場村誌編纂委員会：開田村誌 上巻、開田村、1980年
- 22) 木曾福島町教育委員会：木曾福島町史 第2巻(現代編1)、木曾福島町、1982年
- 23) 日義村誌編纂委員会：日義村誌 民俗編、日義村、1998年
- 24) 三岳村誌編纂委員会：三岳村誌 下巻、三岳村誌編纂委員会、1987年
- 25) 王滝村誌編纂委員会：村誌王滝 下巻、王滝村、1961年
- 26) 志波英夫：大桑村の歴史と民話、志波克己、1978年
- 27) 山口村誌編纂委員会：山口村誌 下巻、山口村誌編纂委員会、1995年
- 28) 長野県西筑摩郡役所：西筑摩郡誌、西筑摩郡、1915年
- 29) 上松町誌編纂委員会：上松町誌 第3巻(歴史編)、上松町、2006年
- 30) 中津川市：中津川市史 下巻 近代編1、中津川市、2006年
- 31) 南木曾町誌編纂委員会：南木曾町誌 通史編、南木曾町、1982年
- 32) 長野県：長野県史 近代史料編 第五卷(三)蚕糸業、長野県史刊行会、1980年